

■大村益次郎(村田蔵六) 村医家の出ながら、戊辰戦争決着に功績、徴兵制度を提唱し“陸軍の祖”になるも、直後に刺殺された。

おおむらますじろう  
異国船打払令1825＝

長州藩小郡宰判鑄銭司村字大村の勘場(村役所)付医家に生まれる。

シボム事件・1828＝ 3歳：

高島砲術・・・1834＝ 9歳：

大塩平八郎乱1837＝12歳：

家を継ぐべく、医業を志して、

天保改革弾圧1842＝17歳：防府の蘭医梅田幽齋に入門、  
順天堂始・・・1843＝18歳：師梅田に勧められて、\_豊後の広瀬淡窓に漢籍を学び、

阿部正弘首座1845＝20歳：

孝明天皇・・・1846＝21歳：\_さらに、大坂の緒方洪庵の適塾に医学と蘭学を学び、  
長崎遊学後、  
・・・1848＝23歳：帰坂し、\_塾頭に任じられ頭角を現すも、

国定忠治疎・・・1850＝25歳：\_帰郷して医業を開くうち、  
\_相次ぐ外国船の来航などによって、蘭学者の知識が求められるようになり、

万次郎帰国・・・1852＝27歳：

ペリー来航・・・1853＝28歳：\*宇和島藩主伊達宗城に招かれ、高野長英の後任の兵器製造・洋学担当の雇士となり、

安政大地震・・・1855＝30歳：\_長崎にオランダ人の海軍伝習所が開かれるにあたり、藩命で、蒸気船の製造を命じられた細工物師前原巧山を連れて出張、技術を学ぶとともに、前原巧山を指導、3年後の成功に繋げるといふ、恐るべき想像力を発揮するほどの才を示し、

松下村塾・・・1856＝31歳：\_開設されたばかりの幕府の蕃書調所に出仕、兵書を翻訳し、技術も知っていたことから重用され、

蕃書調所・・・1857＝32歳：\_講武所教授を務めるかたわら、長州藩士に洋学を教え。

桜田門外変・・・1860＝35歳：\_軍制改革途上の長州藩に呼び戻され、雇士、馬廻士に準じ、のち手廻組に入り、

遣欧使節・・・1861＝36歳：\_藩の近代的兵学教授所である博習堂用掛として講義を行い、

禁門の変・・・1864＝39歳：\_藩校明倫館兵学寮教授になるなど、同藩軍制改革に参画、

薩摩藩士密航1865＝40歳：\_長州藩の実権を握った討幕派の指導者、木戸孝允、前原一誠に重用され、西洋流近代的軍備を徹底させる慶応軍制改革に中心的役割を果たす。この頃から農町兵の組織化を積極的に打出し、  
薩長同盟・・・1866＝41歳：\_第2次長州征伐に際し、軍政用掛として軍略面を担当、身分を無視した新しい軍をつくって、幕軍を敗走させ、全軍の作戦についても、大局観と現実性に秀でた戦略を提案し、軍政に不動の地位を得る。

明治維新・・・1868＝43歳：\_戊辰戦争には、新政府の軍務官、江戸府判事、鎮台府民政会計掛に任じられ、

戊辰戦争終・・・1869＝44歳：\*上野(彰義隊)戦争では、アームストロング砲によって鮮やかな勝利を収めて戊辰戦争を終わらせ、その功で、木戸孝允・大久保利通に匹敵する、永世禄1500石を与えられる。維新が成功に向かうのは、大村のように、武士では無い身分で、武士に愛着が無くとも、天才的構想力を持つとともに実現させて行った実力が正当に評価されたことが大きいことを示すものと言えよう。新政府の軍政を担当することになると、藩兵解散、徴兵制実施、鎮台・鎮守府設置などの急進的な中央集権的軍制を立案、藩兵を主体とする暫定的な中央軍隊を編成しようとする大久保と激しく対立、議論の結果、大久保が勝利したものの、軍事について、他に大村以上の人物がいなかったため、慰留されて新設の兵部大輔となり、早速、大阪に兵学所、京都に火薬製造所を設けるなど、自らの案の一部を実行し始めるが、守旧派藩士や地方草莽志士から憎まれ、京都木屋町で攘夷派の浪士に襲撃されて重傷、その傷がもとで没した。

大村の構想は、歴史の流れを見通したスケールの大きなものであったが、三藩献兵によって作られた中央直轄の軍隊を、西郷隆盛がひきいて、明治維新という革命の核になる廃藩置県が実現したのが没後2年たってからということを見れば、早すぎたと言えよう。没する直前に、招魂社を仮設(東京招魂社)し、それが靖国神社になったこともあって、“陸軍の祖”として、靖国神社に巨大な像が建立されているのである。